

幸手市 社会教育の調査研究報告



幸手市社会教育委員会議

目 次

○はじめに	
○研究の概要	
○調査事例（全14事例）	
＜1 青少年の健全な育成事業（4事例）＞	
1－① 学校と地域との交流（権現堂川小学校の取組）・・	1～2
1－② コロナ禍における学校とPTAの工夫・・・・・	3～4
1－③ すこやか子育て講座・・・・・	5～6
1－④ 幸手子育て支援ねっとわーくPR展・・・・・	7～8
＜2 社会教育の各種活動（8事例）＞	
2－① 香日向ファーム・・・・・	9～10
2－② 元気アップ体操・・・・・	11～12
2－③ 弓道を通しての仲間づくり・・・・・	13～14
2－④ 防災講座・・・・・	15～16
2－⑤ 野菜づくりを通した「豊かな生き方」体験学習・	17～18
2－⑥ ふれあい・いきいきサロン・・・・・	19～20
2－⑦ コロナ禍における地域交流の工夫・・・・・	21～22
2－⑧ 木ごころキャンパス（空き家の活用と地域コミュニティ） ・・・・・・・・	23～24
＜3 歴史・伝統文化の継承（2事例）＞	
3－① 守りたい自治会活動・・・・・	25～26
3－② 大杉ばやし保存活動・・・・・	27～28
○あとがき	

はじめに

幸手市の教育行政施策の観点より市民の皆さまがより良い社会教育を享受できる機会を増やそうとの思いから、私たち社会教育委員が市内において行われている社会教育関連事業の調査に、令和2年度から取り組みをはじめました。

調査をはじめた半ばに、新型コロナウイルスの蔓延に見舞われて調査に間を置かざるを得ませんでした。

コロナ禍により地域や学校、家庭にも大きく支障が生じ、多くの場面において人心のうすれた感の発生している昨今です。失われた人心の繋がりを取り戻すにはコロナ後の社会教育活動が大変重要となると思います。

充実した社会教育活動をするには「いつ、どこで、どのような社会教育活動が行われているか」という情報が必要で、今回調査に当たった社会教育委員の役割も重要であると思います。

各社会教育活動に関わっている人や団体のノウハウを理解している社会教育委員が委員間の連携をとりながら、これから「学びの循環」を実践しようとする人や団体に情報を提供することが良策ではないかと、今回の調査を通じて感じています。

今回の冊子はその情報の提供の一助となるべく作成しましたが、作成にあたり各種団体、学校、自治会、個人、教育委員会、その他の方々にご指導いただきました。また、今後の社会教育活動にこの冊子を活用していただくことを望んでいます。

令和4年8月

幸手市社会教育委員 議長 島村 良孝

研究テーマ

**子どもがいきいきと育ち、市民が学び、
活躍できるまちづくりを目指して**

副題 社会の変化にともなう様々な事業の課題と工夫

研究の概要

(1) 研究の目的

幸手市では、将来グローバル社会で活躍できる人材を育てるために、子ども達の教育及び環境整備に努めています。また、市民の方々が生涯にわたって学び、誰もが活躍できる場を提供できるよう社会教育事業の推進にも力を入れています。

そのために、学校、家庭、地域とのより良い連携を図り、社会の変化に適応した教育環境の整備をしていくことが求められます。

そこで、市内の各団体における諸課題や工夫点について調査をさせていただくことにしました。その調査結果を考察することで、各事業体と情報を共有し、今後のより良い運営に役立てられるように、この調査研究を進めました。

(2) 調査対象

幸手市内教育文化事業

- 1 青少年の健全な育成事業
- 2 社会教育の各種活動
- 3 歴史・伝統文化の継承



事業名：学校と地域との交流（権現堂川小学校の取組）

団体名：権現堂川小学校・学校応援団・環境保全協議会・学校運営協議会

1 団体の活動及び事業に至る経緯

権現堂川小学校は、小規模校ということもあり、いろいろな行事に地域の方に参加してもらうことにより、協力を得たり、学校と地域との交流を深めたりしている。以下、その主な活動について述べてみたい。

2 事業の状況

（1）目的

- ① 様々な活動を通して児童と地域の方々との交流を深める。
- ② 経験豊富な地域の方々から伝統行事や野菜作り等の指導を受けることにより、尊敬する心や感謝の気持ちを養う。
- ③ ケナフの栽培や紙すき体験を通して環境問題への興味・関心を高める。

（2）活動場所

権現堂川小学校（教室・体育館・校庭）

（3）活動日

- ① 6月 まこもの馬づくり
- ② 7月・11月・2月 ケナフの栽培・紙すき体験
- ③ 随時 農業体験

（4）活動内容

- ① まこもの馬づくり
七夕が近づいてくる頃に、近くの水路に自生している「マコモ」を地域の方が刈り取り、学校で「マコモ」を編み込む馬づくりの指導を行う。まこもの馬が天に願い事を届けてくれるという言い伝えがあり七夕集会で作成した馬を飾る。
- ② ケナフの栽培～紙すき体験
環境に良いとされるケナフの種まき・刈り取り・紙すきを地域の環境保全協議会の方から指導を受け体験学習を行う。
- ③ 野菜の栽培
学校応援団の指導のもとサツマイモ・ジャガイモ・ねぎ・たまねぎ・ブロッコリーなどの栽培をする。
植えて、世話をし、観察して収穫の喜びを分かち合う。
- ④ 学校運営協議会
校内に子供たちを支援する学校運営協議会が置かれ活動している。
年数回会議が開かれ学校で困っていることなどを取り上げ解決策を話

し合い協力体制を作っている。

（5）参加者

- ① 権現堂川小学校児童
- ② 学校応援団・環境保全協議会・学校運営協議会

3 内容

（1）課題

- ① 現在活動に参加している地域の方々の高齢化が進んでおり、後継者が減少傾向にある。また、家族（子や孫）が卒業すると活動をやめてしまう場合が多く見られる。
- ② コロナ禍の中でどのように活動を実施していくか。

（2）課題に対する工夫

- ① 地域の方々に呼びかけたり会員を増やしたり、家族（子や孫）が卒業しても継続して活動してもらえるよう呼びかける。
- ② コロナ感染予防対策として、手洗い・うがいの徹底・マスクの活用・教室の換気・アルコール消毒・検温と健康観察等を実施している。

4 参加者や会員の声

○児童の声

地域の方と一緒に楽しく活動できた。やさしく親切に教えてもらいうれしかった。今度どこかで会えたら挨拶をしたい。

○会員の声

子供たちとふれあいながら楽しく活動できた。子供たちが真剣に取り組む様子を見て活動に参加してよかったと思う。

5 成果

○子供たちの様子

- ・地域の方々の指導を受けることにより、郷土に対する愛着心や感謝の心が育っている。

○地域の方々の様子

- ・子供たちとの交流を通して、生きがいを感じることができ、子供たちの笑顔が日々の生活の励みになっている。



事業名：コロナ禍における学校とPTAの工夫

団体名：長倉小学校PTA

1 団体の活動及び事業に至る経緯

創立48周年を迎える長倉小学校のPTA。保護者と先生が協力し合って学校運営に携わり、子供の学習環境を整えていくことを目的に活動する団体で、会長、副会長、本部役員、各専門委員、教員で構成されている。

2 事業の状況

(1) 目的

子供たちが安心して学校生活を送れるよう、先生方のみでは対応しきれない部分を保護者が中心となって補っていく。

(2) 活動場所

長倉小学校

(3) 活動日

- ①約2カ月に一度、学校の会議室で運営委員会（PTA役員及び校長先生、教頭先生が参加）が開催される。
- ②本部役員は運営委員会の前に、議題とする内容につきPTA会議室で役員会を開催し決定する。

(4) 活動内容

- ①学校行事のお手伝い（入学式、卒業式、運動会、持久走大会・・・）
- ②廃品回収、ベルマーク回収
- ③幸手市主催の講演会等への参加
- ④保護者向けの講習会等の開催
- ⑤広報紙の編集・発行（年3回）

(5) 参加者

保護者の中から選出された方々
（選出にあたり立候補者がいない場合には、くじ引きにて決定）

3 内容

(1) 課題

コロナ禍で学校行事等は中止が多かったが、最低限必要な集まり（委員会活動）がある為、どの様に感染防止対策を行いながら活動を継続するのが課題である。

(2) 課題に対する工夫

- ①消毒、換気、マスク着用の徹底した。
- ②LINE等を活用し情報交換を行い、集まる回数を減らした。
- ③参加人数が多くなる集会等の場合、教室を二つ以上に分け、更に時間をずらした。
- ④新年度の委員選出については、事前に立候補用紙を提出する方法で募集し、定員に満たない場合や定員を超える応募があった委員会は、校長先生立会いの下、PTA会長がくじを引いて決定した。

4 参加者や会員の声

- ・学校側の全面的な協力により新型コロナウイルスの感染は防げた。
- ・LINE等を活用した情報交換や連絡だけでは上手く伝わらないこともあった。
- ・直接会って意見を交わしながらの活動の方が手間がかからない。

5 成果

感染防止の観点から、保護者が学校に行く回数が減るようLINE等を活用した委員会活動を積極的に取り入れたが、意思の疎通がうまくいかなかったり、役割分担に偏りが生じたりすることもあった。

しかしその一方で、ウイルスの感染は防止されたし、仕事をされている保護者の方がPTA活動に参加しやすくなった等のメリットもあった。



事業名：すこやか子育て講座

団体名：埼玉県家庭教育アドバイザー

1 団体の活動及び事業に至る経緯

幸手市では就学時健診を活用して就学前の子供を持つすべての親が参加する「すこやか子育て講座」が開設されています。これは市の事業として全小学校で実施され、市の依頼を受けて家庭教育アドバイザーが派遣され講師を務めています。

2 事業の状況

(1) 目的

親が、親として育ち、力をつけるための学習機会を提供することにより、家庭の教育力の向上を図ることを目的としています。

(2) 活動場所

- ①幸手小学校 体育館
- ②権現堂川小学校 図書室
- ③上高野小学校 体育館



(3) 活動日（令和2年度）

- ①10月 6日（火） ②10月 8日（木） ③10月22日（木）

(4) 活動内容

- ①講座：「親の学習プログラム集」増補版2—⑨活用
家庭教育の大切さ～子供の自立に向けて～
- ②講座：「親の学習プログラム集」増補版2—⑨活用
小学校入学までに子供たちに身につけて欲しいこと
～子供の自立に向けて～
- ③講座：「埼玉県家庭教育支援プログラム集」B—①活用
どう育てるの？子供の自立に向けてやる気と根気
～我が家流子供のサポートの方法～

(5) 参加者

- ①新入学予定児童の保護者 45名
- ② 同 11名
- ③ 同 52名



3 内容

(1) 課題

- ①コロナ禍の中で実施される講座という現実を考慮したものとする。
- ②就学を控えた時期、親はどのような心構えが必要なのか・どのように子供に接すれば良いのかを考え、家庭で活かせる子育てのヒントを見つけてもらう。
- ③自分と同じような不安や悩みなどを持っている人の存在を知ること、就学を控えての不安などが軽くなったり、先輩の話聞くことで先の見通しを持ったりしてもらう。
- ④親と子の関係のベースとなるものを伝える。

(2) 課題に対する工夫

- ①従来通りのワークショップ形式ではなく、講義形式とする。実施2週間前からの検温・当日のマスク着用で臨む。学校との打ち合わせで、講師の問いかけに会場の最前列や右端、左端に着席の保護者に応えてもらうことが可能となる。
- ②学校との打ち合わせに従ってエピソードやその他の資料を準備し、それらを参考にして子供の自立に向けての家庭における支援について考えてもらう。
- ③保護者同士の話し合いができないので、挙手で意思表示をしてもらったり、せめて保護者の発言を丁寧に受け止めそれを全体に伝え返したりすることにより共有化を図る。
- ④過去のすこやか子育て講座で参加者の心に響いたと思われるものをまとめとして伝え、最後に全員で詩「子は親の鏡」を読む。

4 参加者の声

- ・子供のことを考える時間ができました。また、いろいろな意見をきちんと聞くことができて勉強になりました。
- ・密を避けるためにグループでの話し合いがなかったことが残念でした。他の親御さんの考え方を知る良い機会なので意見交換があればよかった。

5 成果

アンケート調査の結果（幸手小学校で実施分：45名中39名回答）

○講座への参加（大変良かった；4名 良かった；33名 あまり良くなかった；2名）

○講座内容の理解（よく理解できた；12名 理解できた；27名）

○講座の感想（子供の自立について；5件 親と子の関係について；8件 改善点など4件）

「親の学習」講座はグループでの話し合いが特徴です。令和2年度は新型コロナウイルス感染防止のためにそれが叶いませんでしたが、幸いにも、参加者の皆さんからは実施した講座に対して概ね「良し」との回答をいただきました。しかし、今後感染が収束しなければ、ZOOMのブレイクアウトルームを活用したオンラインでの講座の実施なども視野に入れておく必要があると思われます。

○調査対象 1—④の事例

事業名：幸手子育て支援ねっとわーくPR展

団体名：幸手子育て支援ねっとわーく

1 団体の活動及び事業に至る経緯

市の次世代育成支援行動計画策定会議に参加した地域の子育て支援団体と市民有志を中心に、2007年に正式に立ち上げられました。子供たちが地域で安心して健やかに育っていくことのできる子育て環境を、市民・行政のパートナーシップを進めながら支援していくことを目的に活動しています。

2 事業の状況

(1) 目的

令和2年度はコロナ感染拡大防止のために、毎年開催している「子育て応援まつり」は開催を中止することになりました。そこで、広く市民に「ねっとわーく」のことを知ってもらったり、「ねっとわーく」に参加している団体の様々な活動を紹介したりする目的で「子育て応援まつり」に代わる催しを開催することになりました。

(2) 活動場所

- ① ウェルス幸手エントランスホール
- ② 幸手市ステーションギャラリー
- ③ 幸手子育て支援ねっとわーく You Tube チャンネル
- ④ 幸手市コミュニティセンター

(3) 活動日（令和2年度）

- ① 12月11日～12月18日
- ② 12月1日～12月28日
- ③ 12月1日より
- ④ 12月5日



(4) 活動内容

- ① パネル展示による「ねっとわーく」全体及び参加団体の活動紹介
- ② ギャラリーでの展示による「ねっとわーく」全体及び参加団体の活動紹介
- ③ 動画配信による参加団体の活動紹介
- ④ 体験会



(5) 参加者（来場者）

- ① 来場者数：約 400 名
(小人約 100 名 大人約 250 名 その他約 100 名)
- ② PR 展を見に来た人・偶然 PR 展を見た人
- ③ 「ねっとわーく」メンバーの家族・知人など

3 内容

(1) 課題

- ① 「幸手子育て支援ねっとわーく」の活動を多くの市民に知ってもらう。
- ② 「子育て応援まつり」の趣旨を生かした催しとする。
- ③ コロナ感染予防対策を講じる。

(2) 課題に対する工夫

- ① イベント名を「幸手子育て支援ねっとわーくPR展」として、「幸手子育て支援ねっとわーく」とその参加団体の様々な活動を紹介する
- ② 手作りで、お金をかけないで、知恵を出し合って、そして、学生ボランティアの力も借りて、異世代交流もある、来場者に楽しんでもらえる催しにする。
新しく動画配信を導入する。
- ③ お土産用の手作りのドングリこま、お手玉、あやとり等は、来場者が直接手で触れられないように陳列ケースに入れて展示し、プレゼントする時に受付係が手渡す。

4 参加者や会員の声

2020年9月に入会した会員です。

早速PR展に参画し、幸手市にも生活困窮家庭を支援するボランティア団体があることをお知らせすることができました。

PR展を見た方から問い合わせがあり、その後、物資の提供もいただきました。

5 成果

- 「応援まつり」とは違って来場者は少なかったのですが、市民の皆さんに子育て支援団体の紹介ができたことは意義があったと思います。
- 「コロナ禍の中なのでなにもできない」のではなく、「コロナ禍の中でもできること」を皆で考え、それぞれの特技を活かしながらの協力体制の下で準備し、実行まで漕ぎつけたことは、今後の活動展開の糸口になると思われます。
- 新しい試みに挑戦したことにより、時代の流れに乗ることができました。
- 「PR展」では「応援まつり」とはまた違った繋がり・ふれあいができました。また、学校側からは、様々なイベントが中止になり勉強ばかりの日々だったため、子供たちには良いリフレッシュになったと喜ばれました。
- 会員の会議への積極的な参加の姿勢が見られるようになりました。

事業名：香日向ファーム
団体名：香日向ファーム

1 団体の活動及び事業に至る経緯

香日向地区は1,000戸を超える住宅団地で、スーパーまで徒歩20分以上かかるため、日常的に新鮮野菜等を手に入れにくい。そのため、香日向地区にて家庭菜園をしている有志が、自宅等で栽培した野菜を月2回販売している。趣味と実益というより、地域交流（コミュニティ）の場をつくろうという試みである。

2 事業の状況

(1) 目的

上記のとおり

(2) 活動場所

町内店舗の軒下

(3) 活動日

第1・第3日曜日 8時～11時

(4) 活動内容

- ①野菜づくり
- ②野菜の販売

(5) 参加者

- ①野菜の出店者 現在7～8人（常時出店者は3～4人）
- ②買い物客（地域住民）

3 内容

(1) 課題

- ①素人の菜園（プラントBOXで庭先野菜づくり者もいる）ゆえ1年を通じたコンスタントな提供に苦労している。
- ②冬の野菜のない時期（現在はコロナ騒動）は自粛休店。とりあえず3月末まで。4月から再スタートした。
- ③来訪者が限られているのもっと広範囲の方が来てくれると嬉しい。→広告宣伝が必要と感じる。（チラシ投函等）
- ④2021年9月にJR東鷲宮行きの循環バスが廃止され、高齢者の買い物にはますます不便な地区となる。



(2) 課題に対する工夫

- ①月2回（第1・3の日曜日AM8：00～11：00頃まで）売り切れご免。ほぼ毎回完売！野菜不足を実感！
- ②町内店舗の軒下を月2回借用しての販売。
- ③町内菜園柵や自宅門扉等に吊るし広告にて開店日告示。

4 参加者や会員の声

この企画を発案した方は、プラントBOXの野菜や庭のミカンを出していて、一緒に活動しないかと、犬のお散歩仲間にお声かけしています。

販売日には開始時間前から待っている方もいますし、まとめて沢山買われる方もいて、楽しみにしてくださっているようです。私たちも、喜んでくださりやりがいを感じています。

5 成果

開店以来2年目になり、お馴染みさんもでき、開店を楽しみにしている人がいらっしゃる事は、関係者にとりありがたいことである。

野菜の販売価格は、1袋50円～100円と安価なため、高齢者住民にとっては楽しい社交場にもなっている様であり、犬や本人の散歩のついでに、立ち寄っていただきたいものである。

また、素人菜園の野菜づくりの工夫、知恵の情報交換の場にもなっている。



○調査対象 2—②の事例

事業名：元氣アップ体操

**団体名：(1)元氣アップ OB 会 (2)元氣アップ OB1 (3)元氣アップ OB2 (4)なでしこ会
(5)みのり会 (6)あじさい (7)婦人会元氣アップ体操クラブ**

1 団体の活動及び事業に至る経緯

18 年ほど前に筑波大の久野譜也教授が、100 歳まで筋肉が付くという研究を各自治体に発表をし、その体操を幸手市も始める事となり、一般募集しサポーターを育成しました。その後、10 人くらいでサークル活動を始め、だんだん人数が増え、そこからサークルも 7 つになり、現在は 200 人以上に体操を指導している。

2 事業の状況

(1) 目的

- ①寝たきりにならないように元気で 100 歳まで筋トレを実施
- ②筋トレ、ストレッチ、有酸素運動、脳トレ
- ③年を重ねても友達ができ、(コロナ禍前までは)食事会やバス旅行を実施

(2) 活動場所

- ①ウェルス幸手 ②アスカル幸手
- ③北公民館 ④勤労福祉会館
- ⑤東 5 丁目会館 ⑥北町会館

(3) 活動日

各サークル週 1 回



(4) 活動内容

- ①筋肉体操(腿上げ・腹筋・腕立て伏せ・スクワット・背筋・ダンベル体操・下半身の筋トレ等)
- ②有酸素運動(曲に合わせてリズム体操)
- ③脳トレーニング(手・指・腕の運動、手遊び等)

(5) 参加者

幸手市在住の 65 歳以上の男女を原則としているが 65 歳以下でも参加可
(現在の参加者の平均は 78 歳ほど)

3 内容

(1) 課題

- ①会場の確保
- ②高年齢化
- ③1 人のサポーターがすべてのサークルを担当

(2) 課題に対する工夫

- ①役員を決めて会場取りを対応しています。
- ②65 歳以下の人でも希望をすれば入会をしています。
- ③サポーターの育成を実施しています。

4 参加者や会員の声

- ・入会して 3 か月 65 歳ですが、今まで月謝を支払って習っていた体操は自分に合わなく悩んでおりました。こちらにお世話になってからはしっかりと筋トレを教えてください楽しく参加させて頂いております。
- ・入会して 18 年、80 歳。怪我一つなく今ではサポーターとして指導のお手伝いをするまでになりました。

5 成果

年齢を重ねても、転んで怪我をする人が減り、毎回楽しみに通ってくれています。

社会教育委員として考えても運動は必要だと思い、年齢に関係なくもっと広げていければと考えます。介護保険を使う人も少なくなるのではと考えております。



事業名：弓道を通しての仲間づくり

団体名：幸手市弓道連盟

1 団体の活動及び事業に至る経緯

平成3年に市に弓道場が建設されたのにあわせて、弓道連盟を発足しました。弓道は生涯スポーツとして高齢になっても続けられることから、定年退職をきっかけにはじめる方もいます。会員として続けていきたいと思えるよう、指導やコミュニケーションをとりながら活動しております。

2 事業の状況

(1) 目的

弓道は、自分の体力に合った強さの弓を使うことで、老若男女を問わず同じように行うことのできる生涯スポーツです。「礼に始まり礼に終わる」礼の心を大切に武道を通じての仲間づくりが目的です。

(2) 活動場所

市立武道館弓道場

(3) 活動日

- ①火・木 13時～16時
- ②水・金 18時～21時
- ③土・日 10時～16時

(4) 活動内容

- ①月例射会 会員同士の競技会
- ②初心者教室とチャレンジ武道
新規会員募集として、夏・冬に初心者教室を開催。
武道館主催のチャレンジ武道（親子体験コーナー）にも参加。

(5) 参加者

- ・対象は市内在住・在勤・在学の中学生以上で弓道に興味関心のある方。
- ・現在市外では、久喜、加須、蓮田、白岡、五霞の会員もいます。

3 内容

(1) 課題

- ①弓道は日本の武道としての歴史はあるが、柔道や剣道と比較して絶対的に競技者が少ない。飛び道具を使用するため中学生以上を対象としているが、比較的スポーツに取り込める未就学児や小学生は馴染みのスポーツとして捉えてもらえない。

- ②生涯スポーツとして、定年退職後に始められる方も多い。時間があることから熱心に稽古される方も多いのは喜ばしいことではあるが、年齢バランスのとれたコミュニケーションの場でありたい。

(2) 課題に対する工夫

- ①中高生にアピールして、初心者教室、チャレンジ武道等のイベントにて参加者を募り普及活動を行う。
- ②高齢になって始められた方には、その方の人格を尊重し、長く楽しんでいただけるようなサポートを行い、会員の確保に努める。
- ③コロナ感染対策として、マスクの着用、手指消毒、検温等の徹底に努める。

4 参加者や会員の声

令和4年で6年目になります。最初は体験だけのつもりだった初心者教室でしたが、今では昇段審査も受けられるようになりました。生涯スポーツとして体幹を鍛えられることに感謝しています。我が街に弓道場があったことは大変幸運だったと思います。

5 成果

平成3年に弓道場が建設された際に、弓道連盟が発足しました。弓道に興味を持ち、会員として続けていけるよう、指導やコミュニケーションをとりながら、弓道を広めることができた。弓道場を通じて広く市民に親しんでもらう仲間の輪を広げることができた。



事業名：防災講座

団体名：防災ハート☆フル

1 団体の活動及び事業に至る経緯

2011年の東日本大震災を切っ掛けに地域防災に重点を置き、防災士2名・元消防士1名・栄養士1名・防災知識者1名でスタートしました。震災直後は福島より避難した方々のサポートに徹し、その後は市内外の防災講習等を行っています。

2 事業の状況

(1) 目的

- ①減災
- ②防災に関する知識・意識の向上

(2) 活動場所

市内外の個人・団体・企業からの指定場所

(3) 活動日

- ①原則、土・日曜日
- ②出来る限り平日も対応

(4) 活動内容

- ①防災一般に関する講習
- ②防災用品の展示・説明、使用の実践
- ③防災備蓄収納プランナーの資格を活かした
食料品・防災用品のストックや使用方法の講習
(ローリングストック方法・用品の収納・置き場所等)

(5) 参加者

個人・団体・企業の方々

3 内容

(1) 課題

- ①防災に関する意識が低く、以前行った講習会でのアンケート結果によると、企業参加75名中約70%の53名が防災に対する知識が低かった。
- ②障がい者の防災訓練では当事者の災害意識が低く、親の負担が大きかった結果になってしまった。(保護者から解決案を求められた)
- ③高齢者の防災講習・机上訓練では持ち出す物を追加で探し出し、結果として家から外への避難時間が長くなった。



(2) 課題に対する工夫

- ①知識が低かった企業に対し、新たな防災パンフレットを作成し参加者に対し配布を依頼しました。
- ②障がい者の避難に対しての結論は出てませんが近所の方々に理解を求め発災時に共に避難行動をしてもらう様に検討中です。
- ③高齢者の避難に対しては、災害持ち出し袋にもう一つ袋を付け、その袋を普段必要な物の一括保管場所として活用してもらい、発災時には2つの袋を持って避難する様に指導しました。その結果、追加持ち出しが減り避難時間が速くなりました。(机上訓練時です)

4 参加者や会員の声

障がい者の親です。災害時を想定しての健常者の避難訓練はありますが、障がい者を対象とした訓練は、ほとんど無く前回・今回・次回と講習と訓練を行って頂ける事はとても有り難いです。色々と相談も出来ますし、ご指導して頂ける事に感謝いたします。この先も年1回ではありますが宜しくお願い致します。

5 成果

各講習を通じて調査の結果、防災に対する知識・意識の低い事が解りました。大まかな事はある程度理解している様ですが、細かな事の理解が出来ていない様です。例えば避難する場合は電気のブレーカーを落とす・自宅避難の場合は、冷蔵庫の物から食べる・寝室にはガラスを踏まぬようスリッパを置く・懐中電灯は、手の届く所に置く等々細かな事を書けばキリが有りませんが、この様な事を話すとなぜ、なぜの連発で防災知識の低迷が伺われます。

では、防災に対する知識・意識を向上させるにはどのような事が必要かを考えると次の様な結論に達しました。

- 1. 防災に対する講習拠点を定め、いつでも自由に講義を受けられる体制を作る。
- 2. 高齢者の多い地区（特に団地等）では集会場を利用して防災講習を行う。
- 3. 防災講習専任の担当者を選定する。
- 4. 市が保有する備品等を講習会に利用出来るようにする。
- 5. 市保有の期限間近の備蓄食糧品を破棄せず講習会で配布し実際に食してもらう。
- 6. 高齢者・障がい者を含めた防災訓練を各地区協同行う。
- 7. 仮定の避難所を設置し、実際の受け入れ訓練を行う。
- 8. 仮定の福祉避難所を設置し、実際の受け入れ訓練を行う。
- 9. 分かりやすい防災マニュアルを作成し市民に配布する。

事業名：野菜づくりを通した「豊かな生き方」体験学習

団体名：内藤ファーム

1 団体の活動及び事業に至る経緯

家業が農業だったので農業高校に進学しましたが、教師にあこがれ、教職の道を歩みました。定年退職後野菜づくりに挑戦し、その奥深さと楽しさに魅了され、その輪を広げて行こうと現職時代の同僚や保護者に声をかけ参加者を募り活動を始めました。

2 事業の状況

(1) 目的

- ①土づくりから収穫までの一連の作業を体験することによって、自然を学び、収穫の喜び、大地と自然に感謝する心情を醸成する。
- ②新鮮で安全な野菜を食することで「食育」の一助とする。
- ③体験を通して地域や親子、参加者同士の交流を図り、絆を深めることを目的とする。

(2) 活動場所

- ①均等割された圃場（1家族約 30 m²）
- ②荷づくり作業場

(3) 活動日

- ①参加者の都合に合わせた休日の午前中
- ②年間、1家族あたり平均 7～8 日

(4) 活動内容

- ①土づくりから播種・育苗・追肥・除草・消毒・収穫体験
- ②収穫した野菜をベースにした試食交流会
- ③野菜づくりの基礎学習（作業しながら）

(5) 参加者

- ①小学生以下のお子さんのいる家族（10 家族、30 人位）
参加者＜吉川市・春日部市・越谷市＞
- ②野菜づくりに興味のある人（4 家族、8 人）
参加者＜幸手市・吉川市＞

3 内容

(1) 課題

- ①コロナ禍で活動を休止している圃場管理（9 家族が休耕中）
- ②種や肥料・資材代等の経費負担の理解

- ③猛暑、厳寒期の健康管理
- ④体験希望者の増加に伴う圃場の拡大
- ⑤長く続けられる興味付け

(2) 課題に対する工夫

- ①コロナ禍で活動を休止している家族の圃場管理
○参加できている家族の耕作面積拡大
- ②種や肥料・資材代等の経費負担の理解
○野菜を商品化して販売し、種や肥料・資材代等の経費に充当
- ③猛暑、厳寒期の健康管理
○季節に応じて作業時間の変更、水筒・帽子・防寒対策など配慮事項を事前連絡
- ④体験希望者の増加に伴う圃場の拡大
○耕作放棄地借用の交渉
- ⑤長く続けられる興味付け
○スーパーと同等の野菜づくりを目指す
○畑に行く頻度を軽減できる野菜の紹介
○種まき・育苗は参加者が自宅で管理
○参加者全員が集まるイベントの開催
- ⑥その他の工夫
○小学低学年は好奇心が旺盛で、作業の集中が続きません。昆虫やカエルなどに関心が強いので安全に配慮しつつ放っておきます。気を配りつつも無理して作業をやらせなくてもよい旨を保護者に伝えています。「また行きたい。」という心情を醸成しています。
○作業手順など 1～2 年目は丁寧に教えますが、以後教えずに自立し、自立した菜園家の育成を心がけています。
○こまめに育成状況をメール配信しています。
○保護者には、ご自身のお仕事最優先の基本姿勢をお願いし、ご夫婦での参加を推奨しています。

4 参加者の声

「子どもが嫌いだった野菜を食べるようになった。」「小さな種からあんな大きな白菜が出来るなんて。」「近所にお裾分けしたら喜ばれた。」「子どもがスーパーで買った野菜と味が違うと言っていました。」「次は〇〇が作りたい。」など

5 成果

- ①参加者の増加
- ②作付け品種の増加＜ネギ・白菜・大根・ブロッコリー・枝豆・里芋・八つ頭・ピーナッツ・トウモロコシなど＞
- ③「食」に関する興味が高まり、参加者同士の交流が深まった。

事業名：ふれあい・いきいきサロン

団体名：いきいきサロンさざんか

1 団体の活動及び事業に至る経緯

地域での孤立防止・閉じこもりの防止、健康・生きがいづくり、地域住民との交流や仲間づくり等を目的に、高齢者、障がいのある方、子育て中の親子等が自由に気軽に集まり、地域住民とともに楽しく過ごす場所（サロン）の1つとして、平成26年11月に『いきいきサロンさざんか』を設立し7年目になりました。

2 事業の状況

（1）目的

- ①地域の高齢者の生きがいと健康づくり
- ②医療・介護・地域との連携（地域包括ケア）

（2）活動場所

平須賀吉岡集会所（文珠院）

（3）活動日

毎月第3火曜日 10時～12時

（4）活動内容

- ①暮らしの保健室（健康講話・健康相談）
- ②茶話会・ものづくり（手芸）
- ③健康体操

（5）参加者

- ①平須賀吉岡地区近隣の高齢者と地域住民
- ②地域ケア拠点菜のはなの看護師



3 内容

（1）課題

- ①高齢化により、コミュニケーションが不足して、体調の変化や不安を感じている人が多い。
- ②ロコモティブシンドローム（運動機能の低下）やフレイル（身体的機能や認知機能の低下）の予防が必要である。
- ③会場となっている集会所が高齢者にとって不便な環境である。

（2）課題に対する工夫

- ①ご近所の仲間を誘い合いながら参加を促し、コミュニケーションの機会を増やしています。地域ケア拠点の医療・介護従事者から健康に関する講話や健康相談ができる暮らしの保健室を併設しました。
- ②ラジオ体操やストレッチ体操をみんなで一緒に実施することで、身体を動かす習慣を身に付けるようにしています。
- ③集会所の改修（洋式トイレ・手すり・玄関踏み台）で、利用し易くなりました。椅子を購入して座りやすくしました。

4 参加者や会員の声

平成26年11月に始まった時から参加していますが、皆さんに会えることが何より嬉しく感じています。暮らしの保健室では、自分で気が付かなかった身体の変化を指摘され検査の結果、早期発見・早期治療する事ができて心から感謝しています。

5 成果

- ①サロン発足7年目になり、メンバーの入れ替わりや参加者の増減をくりかえしながら継続しています。暮らしの中で、不安や悩みを話す人や場所があることの大切さを実感しています。
- ②医療や介護の専門職から講話を聴いたり質問したり、また個別の相談も受けることができ役立っています。定期的に顔を合わせる事で、その人の変化に気づき早期発見に結び付く事もありました。
- ③昔ながらの集会所の為、高齢者にとっては不便が多く段々と足が向かなくなりがちでしたが、改修により使い易くなり集まって会話することや運動する楽しさや喜びを継続出来るようになりました。

事業名：コロナ禍における地域交流の工夫

団体名：森の集い

1 団体の活動及び事業に至る経緯

新型コロナウイルス感染予防の外出自粛により、人とのコミュニケーションが減り、会話や運動不足による様々な影響がでていました。既存サロンの活動中止に伴い、仲間に疾病や認知機能の低下が顕著になった為、密を避けながら外での活動『森の集い』を令和2年10月に発足し、新しいスポーツに挑戦しています。

2 事業の状況

(1) 目的

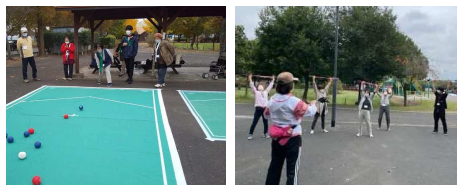
- ①自然の中で人が集いふれあい楽しい時を過ごしつつ、コミュニケーションを取りながら様々な情報共有をする。
- ②新しいことに挑戦する意欲の向上と、運動や音楽で健康増進をする。
- ③新型コロナウイルス感染予防の外出自粛によるストレスの解消をする。

(2) 活動場所

- ①アグリパーク・倉松公園
- ②杉戸町東公民館

(3) 活動日

月2回 木曜日
10時から



(4) 活動内容

- ①ラジオ体操・脳トレ・ノルディックウォーキング
- ②ボッチャ・音楽（カリナ・ケナ・ハトベル）
- ③健康・介護予防の情報交換会

(5) 参加者

幸手市・杉戸町近隣のシニア



3 内容

(1) 課題

- ①新型コロナウイルス感染予防のため、屋内での運動やサークル活動が実施しにくくなった影響により、フレイル（身体的機能や認知機能の低下）が心配されます。
- ②外出自粛によるコミュニケーションの不足で、様々な情報を共有しにく

くなり身体の変化に不安を感じる人が多く見られます。

- ③運動不足や会話が減り、また音楽などの演奏や聴く機会がなくなりストレスを感じている方が多く見られます。

(2) 課題に対する工夫

- ①屋外の公園を活用することにより、密集を防ぎながら運動ができるようになりました。新しいスポーツ（ノルディックウォーキングやボッチャ）に興味を持ってもらう事で、誰にでも出来るという自信と楽しさを感じられます。
- ②今まで行くことのなかった場所で、豊かな自然と触れ合う事ができます。また地域ケア拠点のコミュニティナースや研修医の先生にも参加して頂き、健康に関する講話や個別の相談もできる暮らしの保健室を併設しました。お互いが知りえた健康維持や安心な暮らしに関する情報交換をします。
- ③誰にでもできるラジオ体操から活舌・脳トレなど、様々な健康体操を取り入れています。趣味で音楽演奏されている方々の披露する場を設け練習の成果を発揮し、また演奏を聴く事でストレスの解消をします。

4 参加者や会員の声

これまで体験したこと無かったノルディックウォーキングやパラリンピックで観戦したボッチャの楽しさを味わいながら、仲間と会話できることを幸せに感じています。

音楽を演奏したり聴いたりすることでも、心が癒されストレスを解消することが出来て嬉しく思います。

5 成果

身体を動かすことやコミュニケーションをとることは、大切な生活の一部でありソーシャルディスタンスを保ちながら継続することが必要です。近隣の魅力ある公園を活用することで広範囲の方々との新しいコミュニティも生まれ仲間も増えました。

新しいことにチャレンジすることで前向きになりコロナに負けない健康づくりに繋がります。また、医療・介護との連携で様々な情報交換ができ不安も減り健やかな暮らしに役立っています。

何より楽しい時間を共に過ごすことがストレス解消となり癒しの場になっています。

事業名：木ごころキャンパス（空き家の活用と地域コミュニティ）

団体名：木ごころ倶楽部

1 団体の活動及び事業に至る経緯

ハッピーハンドハウス木ごころ（空き家を活用した地域コミュニティの場）を拠点に、多世代の交流を目的として平成30年に活動をスタートしました。

行政や民間活力も導入して、様々な経験や体験を生かし、共に生きる喜びと感謝の心を持ちながら世代を越えた緩やかなつながりを大切に地域の輪を広げています。

2 事業の状況

（1）目的

- ①地域の高齢者の生きがいと健康づくり
- ②空き家の有効活用と地域包括ケア（地域・行政・民間・医療・介護等の連携）
- ③多世代の交流と支え合いの地域づくり

（2）活動場所

- ①ハッピーハンドハウス木ごころ
（幸手市南3丁目）
- ②近隣の公園（エンゼル公園等）

（3）活動日

- ①毎月第2月曜日14時から
- ②毎月第4月曜日14時から
- ③随時

（4）活動内容

- ①暮らしの保健室（健康講話・健康相談）
- ②ノルディックウォーキング&ボッチャ
- ③子育て支援事業（体験教室各種）
- ④交流事業（マルシェ・音楽会）
- ⑤聞き書き

（5）参加者

地域の子どもから高齢者までどなたでも



3 内容

（1）課題

- ①空き家の有効活用
- ②少子高齢化に伴う、地域包括ケアの必要性
- ③世代間の交流減少による、地域コミュニティが希薄化

（2）課題に対する工夫

- ①民間活力を生かし、工務店が所有していた空き家を住宅改修し、地域貢献の為にコミュニティスペースとして提供しています。構想段階から地域住民や大学生にも関わってもらい多くのアイデアが生まれました。
- ②医療・介護などの専門職と連携し地域包括ケアシステムの1つである『暮らしの保健室』を毎月実施しています。人生100年の生きがい創出の場づくりと支え合いの工夫をしています。
- ③子育て応援サークル事業も取り入れ、多くの方々の知識や技術を子供たちに伝えながら世代間の交流を深めています。

4 参加者や会員の声

木ごころには様々な年代の人が集まり、生きがいを感じたり学びの場になっています。知らなかった事や新しい事にも挑戦する前向きな気持ちになります。健康にも不安を感じる事がありますが気軽に相談もできて安心できます。

これからも仲間を誘い合い、積極的に参加して楽しい時間を過ごしていきたいと思います。

5 成果

- ①空き家が増加し防犯管理も必要となっていますが、民間活力を導入して地域のコミュニティスペースを創り有効に活用しています。子供から高齢者まで、それぞれの目的に応じて楽しい時を過ごすことができています。
- ②住慣れた地域で、誰もが安心して暮らせるように、様々な知識や経験を持った方々と連携しながらより良い場づくりが広がってきています。
- ③『子供達には生きる力を、高齢者には生きがい』を合言葉に、それぞれの力を発揮しながら有意義な交流の場になっています。共に生きる喜びを感じ感謝の心も養う事ができるようにもなっています。

事業名：守りたい自治会活動

団体名：神扇自治会

1 団体の活動及び事業に至る経緯

退職して自治会活動に携わる中で、高齢化や若者（家の後継ぎ）の都会への進出が進み、古くから大切にしてきた地域のコミュニティ活動や伝統的な文化が風化していくことを危惧し、今後の自治会活動改善の必要性を強く実感したため現状把握から始めました。

2 事業の状況

（1）目的

神扇地区の歴史を調べると、天神八幡神社は 西暦 1,300 年頃に建立されており人々の暮らしがあった。1,650 年頃幸手領主の一色氏が、一面葦の生い茂る沼地に釣りにきた際、落雷にみまわれ、後醍醐天皇から拝領した金箔の扇子をも投げ捨てて難を逃れたことから「神扇」となったとされる。

湿地帯でも米づくりができるよう大小約 200 カ所に大穴を掘り、その泥でかさ上げして稲作を行ってきたが、50 年ほど前に土地改良事業が行われる前は、2～3 年に 1 度の水害にみまわれ住民を苦しめてきた歴史がある。私が小学生の頃は、青年団の人たちが渡し船で学校まで送ってくれた思い出もある。

利根川の決壊時に流れ着いたとされる石地藏が、「土の中で苦しんでいる声がしている。」それを聞いた村人が掘り出して祠をつくり、守り神としたとの言い伝えがあり、毎年7月に「地藏尊まつり」を実施している。その他にも、稲わらで造った大蛇と大草鞋を奉納して悪疫退散を祈願するなど四季折々に伝統的な文化を大切にしてきた。これらの伝統的な文化を後世に伝えるべく、組織改革していくことを目的とする。

（2）活動場所

- ①神扇集会所 ②神扇地区内

（3）活動日

- ①委員会＜年 6 回＞
②必要に応じて全体会
③その他必要に応じた活動

（4）活動内容

- ①自治会の運営に関することの協議
②天神八幡神社総代と連携した神事の実施
③地藏尊まつりの当番班（4 班）との連携

- ④八代地区運動会への参加
⑤地区総出のクリーン作戦と不法投棄の見回り回収・情報収集
⑥安心、安全な生活の推進に関わること
⑦共同募金など県や市への協力

（5）参加者

- ①各班から選出された委員 8 名、会長 1 名、会計 1 名
②各班から選出された神社総代 4 名
③「地藏尊まつり」の当番班
④自治会加盟軒数 58 世帯

3 内容

（1）課題

- ①自治会長他、役員の選出が困難
②神社の氏子脱退者が急増し、祭事開催が困難
③高齢化に伴う「ゴミ当番」の実施困難
④伝統的な神事（大蛇や草鞋づくりなど）の技能継承

（2）課題に対する工夫

- ①自治会の一本化（2019 に決定）と役員任期（1 年から 2 年）に延長（2020 に決定）
②新年祭、大蛇祭、おびしゃ祭など祭事の簡略化
③ゴミ当番表の再編成
④技能取得者を招いた講習会の実施

（3）今後改善、検討が必要なもの

- ①自治会規約の改正
②「地藏尊祭り」運営当番の 1 本化
③一人暮らしの高齢者見守り
④自治会運営に関する徴収金額の見直し

4 参加者の声

- ①「自治会の一本化は積年の課題だった。」
②「自治会長職は今後 2 年以上がよい。」
③「10 年先が更に心配だ。」

5 成果

- ①自治会役員を複数年経験することによって、事業の効率化が図られるようになった。
②有志が数人か集まり、今後のことについて情報交換しようという声があった。

事業名：大杉ばやし保存活動

団体名：高須賀大杉ばやし保存会、行幸小学校郷土芸能クラブ

1 団体の活動及び事業に至る経緯

大杉神社の祭りばやしの笛の演奏者が氏子の田中さんのお父さん一人になってしまった時に、田中さんが後継者を育成しなければ祭りができなくなってしまうと思い、有志を自宅に集めお父さんと共に承継の為の練習を始めた。平成8年に校長先生の尽力で行幸小に郷土芸能クラブが発足し指導すると共に承継につながる事業になっている。

2 事業の状況

(1) 目的

- ①小学校における地域の歴史、伝統文化の学習
- ②地域の伝統行事の継承
- ③地域住民の融和懇親

(2) 活動場所

- ①大杉神社
- ②行幸小学校
- ③個人宅

(3) 活動日

- ①木曜日（行幸小）
- ②必要に応じて（神社・個人宅）

(4) 活動内容

- ①伝統行事、歴史の学習
- ②演奏技術の向上練習

(5) 参加者

- ①地域の行幸小学校児童
- ②神社氏子、会員

3 内容

(1) 課題

- ①児童の減少
- ②楽器の保守費用
- ③指導者、指導時間の設定



(2) 課題に対する工夫

- ①平成8年に行幸小学校郷土芸能クラブ発足以降は高須賀地区外からの児童参加もあり落ち着く。
- ②楽器の保守費用の調達は保存会と学校備品の使い分けも難しく苦勞している。
- ③指導者は時間が比較的に融通のきく高齢者ばかりでないので分担分けしている。

4 参加者や会員の声

参加者にはおおむね好評のようです。

児童においては学校授業にない楽器にふれ演奏出来る事、学んだ演奏技能を学校以外の会場においても発表出来る喜びや達成感が大きいようです。

指導者、会員においては地域の子供を指導している喜びと伝統文化を守る誇りを感じているようです。

5 成果

祭礼日や演奏会になると地域の氏子や会員は勿論、地域を離れた会員や先輩たちも演奏に加わったり、指導したりと、和やかに行事が進んでいます。

他地域において後継者がいなくなり伝統行事、文化が守れない事と比較すると人的においては当分の間承継できそうですが運営資金面での心配もあるようです。

あとかき

今年度、市内で活動されている青少年の健全な育成団体、社会教育の各種活動団体、歴史・伝統文化の承継団体につき調査・研究を行ってきましたが、コロナに負けず人と人との繋がりを大切にしながら活動を継続していくことで地域のコミュニティー活動が活発になり、伝統文化も風化することなく後世に受け継いでいけるのだと強く感じることができました。

また、大人たちが主体となって地域の活動や学び、人と人との繋がりを大切にすることによって、将来を担う子供たちにも大切なことを伝えていけると思います。

さまざまな分野に精通した社会教育委員が地域の各団体で活動をする中で、研究テーマに沿った調査を行いこのような形でまとめることができました。

まだまだ新型コロナウイルスが収束する兆しが見えませんが、各団体とも活動を自粛するのではなく、アイデアを出し合い工夫を凝らすことで楽しく活動を継続していけるのだと気づきを得ることができました。

今後も更なる社会教育の発展の為、社会教育委員全員が一致団結して調査・研究を続けていきたいと思います。

幸手市社会教育委員

制作スタッフ

幸手市社会教育委員

議 長	島村 良孝
副議長	藤原 徹也
委 員	栗田 勇夫
委 員	山田 ヒサ子
委 員	島田 雪子
委 員	高橋 均
委 員	小川 哲也
委 員	福島 朱実
委 員	内藤 健司
委 員	大久保 浩子
委 員	安田 健一

幸手市社会教育の調査研究報告

発行日 令和4年8月16日

事務局 幸手市教育委員会 教育部

社会教育課 社会教育担当

TEL: 43-1111 内線 643